

梵語音の仮名表記を巡って

沼 本 克 明

目次

序

一、梵語重子音の仮名表記

1 悉曇章を中心とする梵字音の仮名転写

2 漢訳陀羅尼の仮名転写

3 法華経陀羅尼の仮名転写

二、梵語音と漢字音の仮名表記

序

訓点資料は、従来、そこに記入されている日本語に注目し、国語資料としての視点から取り上げられるのが主流であった。訓点資料が国語資料として、和文系資料の欠を補うものとして導入されたという由来を考えれば、それは当然なのであるが、別にこの資料群は、日本語と外国語との接点に存在したという大きな特色を有している。外国語との接点に在ったという視点から、この訓点資料群は従来の研究にも活用されて来たのではあるが、それは主に中国語との接点

に在ったことに焦点が置かれ、日本漢字音の研究に殆ど絞られて来たといつて良いであらう。しかし、この外国語との接点に存在したとする、その外国語には、中国語の他に、もう一つ梵語（古代サンスクリット語）が含まれていたという点が看過すべからざる重要な意味を持つてゐる。勿論、従来の研究においても、この梵語が全く問題にされて来なかつたというのではないが、どちらかと言えば、それは漢語（中国語）研究の添え物としての取り扱いであつたと言わねばならないと思う。その背景には、梵語音は、対注漢字を通して学習されていたという考え方があつた訳であつて、概して言えば、漢語主、梵語従という比重を置かれながら論じられて来たという観を拭えない。然し、筆者は、平安朝初期以降の入唐僧らは梵文を直接学習研究の対象としていたと考え、平安朝初期以降の訓点資料、就中、後世への影響という点から極めて重要な位置に在る密教系のそれについて言えば、中国語と梵語はこれ等を互いに区別して取り扱うべきものではなく、一体の外国語として見るべき必要が有るように思うのである。

従来、密教系の仏典に含まれる梵語は漢訳されているために、その梵語は、中国語の側からこれを観察分析の対象として見るのが主たる研究方法であつた。つまり、中国語を通して梵語を見るという方法であつたために、陀羅尼の研究も、漢訳陀羅尼のみが研究対象として取り扱われていたと言わねばならない。そこに一種の陥穽或いは盲点が有つたように思われる。

例えば、四声点の実用、有無気音の識別、清濁音の識別、及びそれ等の日本語への適用は、専ら中国語（漢字音）と日本語との対照から発生したものであるという捉え方が常識であつたと思われる。然し乍ら、これ等の最初期の姿を具体的に観察してみると、むしろ梵語音の学習のため、梵語と日本語との対照から出発したと思われる部分が少なくない。亦、梵語とも中国語とも区分出来ない、両者が融合した「外国語」との対照から出発したと考えられる部分も存する。

三内撥音や三内入声音及び拗音の識認や表記法の形成も、我々は中国語の日本語への取り入れの問題としてのみ取り扱つて来たが、これ等も、平安朝人にとって、梵語学習においても亦重要な問題であつた訳である。

この様に考えてみると、本邦人が接した「外国語」には中国語と梵語とが対等に位置するものとして分析して行く必要が有ることは明らかであろう。現実に、先に言及した平安朝初期末以降の密教系の訓点資料は、正に漢語と梵語が融合して存在している資料群なのである。密教系の訓点資料を外国語との接点に在る資料群として総合的に把えてみる必要が有る。

本稿では、以上の様な問題意識の下で、外国語の仮名表記法という視点から、平安時代から鎌倉時代の具体的な訓点資料を取り上げて論じてみることにする。

一、梵語重子音の仮名表記

日本語は母音一つ、乃至子音一つと母音一つの形で、 v 、 cv 構造として記述できる音節を原則とし、万葉仮名もこの音節の表記に沿う形で形成されて来た。中古漢語の音節構造を、これにならって記述すると、 $v \cdot cv \cdot c \cdot cv \cdot c$ の構造になる。これ等は、日本語の中に取り入れられるに際し、仮名で表記出来る形に組み直され、最終的には次の様に変化して定着した。

v 阿↓ア v

cv 他↓タ cv

csv 去↓キヨ $*csv$ ($s||i$)、 csv 化↓クワ $*csv$ ($s||u$)

cvc 察↓サツ $cv+*c$ (↓ $cv+cv$)、 cvc 三↓サム $cv+*c$

cvv 教↓ケウ $cv+v$

$csvc$ 出↓シユツ $csv+*c$ (↓ $csv+cv$)、 $csvc$ 春↓シユン $csv+*c$

右の中の、*印の音節が新たに日本語の中に生じることになった。

扱、では梵語の場合はどういうことになるであろうか。

梵語の日本語に対する大きな特徴は、それが重子音言語 $ccv \cdot \cdot \cdot$ 、 $cccv \cdot \cdot \cdot$ であるという点であった。もう一方の外国語である中国語にもこの重子音は存在しなかった。この重子音を日本語に取り入れる際にどう処理したかについては、従来、ヨーロッパ語との接触以後の外來語の表記の問題として言及されることが有ったのであるが、実は古い梵語との接触においても、この問題は存在したのである。

先ず、最初にこの重子音の問題について、順次古い梵語資料を取り上げて考察しておくことにする。

1、悉曇章を中心とする梵字音の仮名転写

先ず、梵字そのものを本邦人が読んで振り仮名を加えた資料を、平安初期から順次取り上げてみる。

① 悉曇章 靈巖寺和尚本條 (外題) (東寺藏)

靈巖寺和尚円行八七九八〇八五二〇の伝が有る。付載の仮名字体表によつてうかがわれる様に平安初期九〇〇年以前の加點と推定できる。

先ず、二重子音字の場合について、若干例を抜き出して示してみると次の様である(用例では原本に有る対注漢字は省略した。尚、以下、梵字は原則としてローマナイズして表記した。)

◎ <small>クシニ合</small> kṣa	<small>クシニ合</small> kṣi	<small>クシニ合</small> kṣu	<small>クシニ合</small> kṣe	<small>クシニ合</small> kṣai	<small>クシニ合</small> kṣo	<small>クシニ合</small> kṣau	<small>クシニ合</small> kṣap	<small>クシニ合</small> kṣaj
◎ <small>クニ合</small> kra	<small>クニ合</small> kri	<small>クニ合</small> kru	<small>クニ合</small> kre	<small>クニ合</small> krai	<small>クニ合</small> kro	<small>クニ合</small> krau	<small>クニ合</small> kram	<small>クニ合</small> krah
◎ <small>クニ合</small> tra	<small>クニ合</small> tri	<small>クニ合</small> tru	<small>クニ合</small> tre	<small>クニ合</small> trai	<small>クニ合</small> tro	<small>クニ合</small> trau	<small>クニ合</small> tram	<small>クニ合</small> trah

◎	VTA	VTi	VFO	VFE	VTai	VFO	VTau	VTam	VTah
◎	kva	kvu	kvu	kve	kvai	kvo	kvau	kvam	kvah

次に、三重子音字の例を若干示すと次の様である。

◎	ksta	ksti	kstu	kste	kstai	ksto	kstau	kstam	kstah
◎	kma	kmi	kmu	kme	kmai	kmo	kmau	kmam	kmah

◎	ksha	ksjh	ksju	ksjhe	ksjai	ksjho	ksjhu	ksjam	ksjah
◎	fkxa	fkxi	fkxu	fkxe	fkxai	fkxho	fkxau	fkxam	fkxah

字頭に「フ」行音を加えている。）

右の例によつて知られる様に、重子音の表記は、母音を揃える方式が取られていることが明らかである（この方式を「フ」では「母音調和式」と仮称することにする）。次の様である。

kri→kri krau→krau ksti→ksti ksto→ksto ksmo→ksmo

もつとも、完全に揃えていないもの、例えば、

kre→kri tre→tri kste→ksti krau→krau

の如きものが出現するが、大旨これ等は、エ↑イ、オ↑アの様な、近似母音の範囲での交替と言えそうである。基本的には、「母音調和式」で振り仮名が加えられていると見ることが出来るのである。

所で、これ等の方式が、対注漢字の漢字音の読みによって当てられた仮名かどうかの問題になるが、そうでないことは、次の様な例を示すことによつて、容易に知ることが出来る。

フ 漢字 漢字音 漢字音 漢字音 漢字音 漢字音 漢字音 漢字音 漢字音 漢字音

梵語音の仮名表記を巡つて

右の様に、対注漢字は、本悉曇章の場合は、前に立つ子音は、全て同一漢字で統一されているのである。他の例も全く同じ方法で対訳されている。

② 大悉曇章（東寺蔵）

加點時代の手掛かりは具体的なものは存しないが、築島裕博士²⁾に従って九三〇年頃として取り扱う。付載の仮名字体表によつて見ると、若干下げた方が良いかも知れない。

部分加點であるので、仮名の有る部分のみを抜き出して若干例を示してみる。

◎ kša	クシャ	クシュ	クシャ	クソ	クサン	クサン
◎ kṣa	クシ	クセ	クシャ	クソ	クサン	クサン
◎ kṛa	クド	クレー	クド	クラン		
◎ cṛa	クド	クレー	クド	クラン		
◎ kṣja	クド	クシュ	クシャ	クソ	クサン	クサン
◎ kṣba	クド	クシュ	クシャ	クソ	クサン	クサン
◎ tṣa	クド	クシュ	クシャ	クソ	クサン	クサン

本資料の場合も「^サツ」の行の例に典型的に見られる様に、母音調和式で振り仮名が加えられている。但し中に、「^サツ」の様な kṣa ↓ ㅅ の如き例が有り、これは①には見られなかつたものである。これは、響度の低い狭い母音 ㅅ を持つ音節（仮名）を選択したもので、以下これを「母音消去式」と呼称することにする。

③ 悉曇章 慈覺大師撰 金箱伝写本（外題）（東寺蔵）

本書は南北朝期に東寺賢宝によつて転写された本³⁾であるが、その原本は平安中期九五〇年頃に位置づけ出来るものと判断されるのでここに序でる。但し、賢宝が原本を転写するに際し、判読出来ないままに写したり、場合によつては改変したのではないかと思われる不審な部分が含まれている。然し、原本の平安中期の面影は十分にうかがうことが可能

である。

若干例を抜き出して見ると次の様である。

◎	キサ	キシ	クス	クセ	キサ	クソ	キサウ	クサン	クサ		
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クユ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	キヤ	クヤ	

基本的に母音調和式であるが「カキサ」を「コ(カ)サ」形でなく「キサ」と表現しているのは、②と同じ方法が採用されたものといふことになる。

④ 悉曇章 都説大指韻* (外題) (東寺藏)

本書も③と同じく南北朝時代の東寺賢宝転写本である。その原本は天元五年(九八二)の大西阿闍梨御房の読点であるという。賢宝はその朱点が繁多であったので省略してしまつたと言う。本文には所々に朱点の仮名と声点が残されている。従つて正確には平安中期天元五年の全貌を知る訳には行かないが、参考にはなると考えられる。賢宝は正確に解読できなかったらしく不審な部分も少なくない。仮名字体は付載の表の如くであつて、平安中期の祖点であることは間違ひは無いであらう。

若干例を抜き出すと次の如くである。

◎	キサ	キシ	クサウ	クサム	(本資料には対注漢字無し)
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クヤム	
◎	カヤ	キヤ	クヤ	クヤム	

梵語音の仮名表記を巡つて

◎ *nyā* *nyī* *nyū* *nye* *nyai*

二重子音の例が右の例しか見られないが、「*nyā*」の行に就いてみれば、基本的には、やはり母音調和式が取られている。但し「*nyā*」の「*k*」を「*ki*」で、「*nyā*」の「*k*」を「*kyā*」で、の様に「イ列仮名」「ウ列仮名」での転写が漸次増加している様子がうかがえる。この「*i*」「*u*」は狭母音であつて、*ccv*の*c*を表現するには適した仮名であつたことになる。母音調和式の古い方式から、時代が降るにつれて母音消去式の新しい方式が増加して行ったことを物語る。それは亦音声観察の進化ということが出来る。平安朝初期に梵語重子音の表記は、母音調和式に始まつて、平安中期末には母音消去式が増加して行つたという把え方が出来るであらう。

以上は「悉曇章」の例である。

⑤ 仁壽章 不空釋索明 (隨心院藏) ⁽⁶⁾

仁海僧正(九五一一〇四六)と伝えられる梵字真言の写本であり、同時期同僧正による片仮名の振り仮名が所々に加點されている。その二重子音字の例を取り出すと次の如くである。

śīryā *īpā* *bhya* *bhyaḥ* *svā rā* *tva* *ma ha prā* *śī śca*

「*īpā*」「*prā*」(「*i*」は「*ra*」の誤りか)は母音調和式である。「*śīryā*」は母音調和式でもあり母音消去式でもある。「*svā*」「*śī*」「*śca*」及び「*tva*」は母音消去式である。加點時代は大旨一〇〇〇年頃と見られ、両式が混用されているのは④の延長線上にあるものとして当然と言えるであらう。

⑥ 悉曇章抄中抄 (東寺藏) ⁽⁶⁾

尾題「悉曇略抄」。奥書に「康平四年(一一〇六二)八月三日於(以下抹消)」と有る。多分書写奥書であらう。成立はもう少し遡るかと考えられる。誤写が所々に有るので転写本であることは明らかである。本書の梵字の振り仮名で關係有る部分を若干例示してみる。

ksa	迦左 <small>カサ上</small>	カシヤ
ksa	迦左 <small>カサ去</small>	カシヤ
ksi	幾支 <small>キシ上</small>	キシ
ksi	幾支 <small>キシ去</small>	キシ
ksu	句朱 <small>クス上</small>	クス
ksu	句朱 <small>クス去</small>	クス
kse	伎勢 <small>キセイ上</small>	キセイ
ksai	伎妻 <small>キサイ去</small>	キサイ
ksō	居送 <small>コソウ上</small>	キヨソウ
ksau	迦早 <small>カサウ去</small>	キヤサフ
ksam	迦三 <small>カサム去</small>	キヤサム
ksaj	迦弱 <small>カサク去</small>	キヤシヤク

(万葉仮名式) 漢字注の方はかなり母音調和式が保存されていることがうかがわれる。平安初期の悉曇章の場合と比べると、平安初期では「kse」が「ケセ(イ)」であり、「ksai」が「カサイ」である点のみが異なっている。この部分のみが母音調和式がくずれていると言える。振り仮名の方になると、「ksō」を「キヨソウ」、「ksam」を「キヤサウ」の如く、拗音に読んだために、全体が「キ…」に統一され、いわば母音消去式に統一されようとしていると見ることが出来る。

但し、念のために付記しておけば、本書の本文の成立と、振り仮名とは別の時期のものであって、本文は梵字そのものに漢字(但し万葉仮名を基本とする日本式注音法)で注音したもので、その本文成立時期にはまだ明らかに母音調和

式が行われていたのである。これに対して振り仮名は一〇六一年当時の方式であり、その為に新しい方式に変遷していると把えるべきである。

この更に延長線上に、明覚の注音法が有る。

⑦明覚の著書

明覚（一〇五六〜一一二二以後没）については贅言を要しないであろう。代表的な著作の例を示してみると次の様である。

1 悉曇大底（一〇八四年成立）（永暦元年写本叡山学院蔵） ①

^{キシヤ} 𑖀 ^{クシユ} 𑖁 ^{キセイ} 𑖂 ^{キシヨ} 𑖃 ^{キシヤウ} 𑖄 ^{キシヤム} 𑖅 ^{キシヤク} 𑖆
カサニ 𑖇 クサ 𑖈 クシ 𑖉 クシ 𑖊 クシ 𑖋 クシ 𑖌 クシ 𑖍 クシ 𑖎 クシ 𑖏 クシ 𑖐
カサニ 𑖑 クサ 𑖒 クシ 𑖓 クシ 𑖔 クシ 𑖕 クシ 𑖖 クシ 𑖗 クシ 𑖘 クシ 𑖙 クシ 𑖚

（修正して示す）

^{キヤ} 𑖀 ^{キヤ} 𑖁 ^{キヤ} 𑖂 ^{キヤ} 𑖃 ^{キヤ} 𑖄 ^{キヤ} 𑖅 ^{キヤ} 𑖆 ^{キヤ} 𑖇 ^{キヤ} 𑖈 ^{キヤ} 𑖉 ^{キヤ} 𑖊 ^{キヤ} 𑖋 ^{キヤ} 𑖌 ^{キヤ} 𑖍 ^{キヤ} 𑖎 ^{キヤ} 𑖏 ^{キヤ} 𑖐
キヤ 𑖑 キヤ 𑖒 キヤ 𑖓 キヤ 𑖔 キヤ 𑖕 キヤ 𑖖 キヤ 𑖗 キヤ 𑖘 キヤ 𑖙 キヤ 𑖚

2 梵字形音義（一〇九八成）（建長二年写本東寺観智院蔵） ②

^{キヤ} 𑖀 ^{キヤ} 𑖁 ^{キヤ} 𑖂 ^{キヤ} 𑖃 ^{キヤ} 𑖄 ^{キヤ} 𑖅 ^{キヤ} 𑖆 ^{キヤ} 𑖇 ^{キヤ} 𑖈 ^{キヤ} 𑖉 ^{キヤ} 𑖊 ^{キヤ} 𑖋 ^{キヤ} 𑖌 ^{キヤ} 𑖍 ^{キヤ} 𑖎 ^{キヤ} 𑖏 ^{キヤ} 𑖐
キヤ 𑖑 キヤ 𑖒 キヤ 𑖓 キヤ 𑖔 キヤ 𑖕 キヤ 𑖖 キヤ 𑖗 キヤ 𑖘 キヤ 𑖙 キヤ 𑖚

3 悉曇要決（一一〇一以後成）（天福二年写筑波大学蔵） ③

^{キヤ} 𑖀 ^{キヤ} 𑖁 ^{キヤ} 𑖂 ^{キヤ} 𑖃 ^{キヤ} 𑖄 ^{キヤ} 𑖅 ^{キヤ} 𑖆 ^{キヤ} 𑖇 ^{キヤ} 𑖈 ^{キヤ} 𑖉 ^{キヤ} 𑖊 ^{キヤ} 𑖋 ^{キヤ} 𑖌 ^{キヤ} 𑖍 ^{キヤ} 𑖎 ^{キヤ} 𑖏 ^{キヤ} 𑖐
キヤ 𑖑 キヤ 𑖒 キヤ 𑖓 キヤ 𑖔 キヤ 𑖕 キヤ 𑖖 キヤ 𑖗 キヤ 𑖘 キヤ 𑖙 キヤ 𑖚

これ等諸本の振り仮名が明覚自身のものであつたのか、転写者の加点かが問題となるが、諸本の振り仮名が各転写本においてほぼ一致しているので、祖本つまり明覚自筆本に有つたものと見て良い様に思われる。

その前提の上で、明覚の諸本を見ると、大旨最初の子音の表記は同じ仮名に統一される（つまり非母音調和式）傾向が顕著である。中に、母音 u・o を含む場合に限つて「クス」「クユ」「クロ」「コロ」の如き母音調和式を保存していると言ふことができる。段々と母音調和式がすたれ、母音消去式に統一される時代背景がうかがわれるのである。

⑧密宗悉曇章（永万二年（一一六六）写東寺観智院藏）^⑥

本書は延懷（生没年未詳）の著であるが、この期になると、母音消去式にほぼ定着していると言えそうである。

キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク

一部別形として「クシユ」「クスユ」「クシウ」が併記されているが、全て「キ…」で統一されている。但し、本資料の場合も全てがそうではなく、

キ	キ	キ	キ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
キ	キ	キ	キ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク

の場合「クル」「コロ」の如き母音 u・o の場合には一部母音調和式が見られるが、多分先蹤が痕跡的に移転・転写形として残されたものであらうと思う。

以上梵字そのものについての重子音仮名転写法においては、平安初期～中期までは、母音調和式が行われていたことが明らかになった。そして平安後期初頭頃から母音消去式が発生し、特に、摩擦系子音の場合には「㊸」仮名が、破裂音、流音系子音の場合には「㊹」仮名が使用されはじめ、明覚の辺りからこれが一般的になつて行く様である。

扱、以上を、「梵語」の読み方という観点から把えなおせば、平安初期～中期において重子音を含む梵語である場合には、母音調和式で読むのが良いということになる。具体例で示せば、

ひぢ (hi-ja) (漢訳「達磨」)

は「ダラム」で読むべきであり、

はぢ (ba-ja) (漢訳「縛日羅」)

は「バザラ」で読むべきであるということになる。

そして、それが、平安後期以後、母音消去式の「ダルマ」「バジラ」へと読み方を変えて行ったことになる。以上の動きは、次の漢訳陀羅尼の読み方の検討によって検証することが出来る。

ちなみに、平安後期に入って「ダルマ」「バジラ」の如き、母音消去式が採用される様になった背景は、音韻学の発達と把えることが出来るであろう。これ等の「ル」「ジ」は、原音「 r 」「 z 」の母音 ϕ に対応する仮名として響度の小さいウ列、イ列仮名(音)が意図的に選択されたものである。この期に至ってそういう観察が可能になったということであろう。

所で、以上は梵字資料でも、主として単独の梵字を対象としたものであるが、実際の梵文陀羅尼を読んだ資料では後世まで平安朝初期の母音調和式を保存している場合があった。いまその具体的な例を一つ紹介しておく。

⑨ 仁和寺蔵尊法真(鎌倉初期写加点)

本資料は、識語が存在しないため、その加点の系統をつまびらかにしないが、仁和寺蔵ということ、真言宗のものとも見てもよいであろう。

真言尊法在後陀羅尼

ムヂス^ホワ^ラソ^ダス^{ナウケ}セン^{ザン}ズ

ふんふんふんふん
トモシクハハラハサケイトナラズサ

(中略)

クイイ本

みまゝいひいゝてまゝ
ミマサ イヒイヘマサ

ここに見られる様に、母音調和式の読み方が良く保存されているのである。

2、漢訳陀羅尼の仮名転写

次に、漢訳仏典中の陀羅尼が古來どの様に音読されているかを見て行くことにする。大乗經典中の陀羅尼は、平安初期には読まれていなかったらしく加点されていない。従って対象は密教經典に限られることになる。

①金剛界儀軌寛平元年点（石山寺校倉聖教）（天台宗）

○薩嚩・達莫引入声譯

dharmā を「ダラマク」としたものの。

○唵囉日囉底瑟姪を吐

vairo を「バゾロ」としたものの。

○嚩日囉達摩を

dharmā を「ダラマ」としたものの。

○布惹羯磨拈・阿怛麼南を

karmāne を「カラマネ」

「サ」は「s」を、「下」は「t」を表記したことになり、前者は「薩」の字音にひかれたもの、「怛」は母音消去式と見て良い。

③仏母大孔雀明王経平安初期点（仁和寺蔵）（真言宗）

○麼娜鞞駄寧（母音消去式）

īda を「バリ(梵)」としたもの。

○疾囉（母音調和式）

śra を「ガ(ラ)」としたもの。或いは「迦」は「ギャ」の拗音を示すものか。

○乞史（母音調和式。消去式でもある。）

ksi を「キ(シ)」としたもの。

○紇哩（母音調和式）

ṣi を「キ(リ)」としたもの。

○乞灑哩（母音消去式）

ksa を「ク(サ)」としたもの。

○濕縛（母音消去式）

sva を「ソ(バ)」としたもの。

○訖哩（母音調和式。消去式でもある。）

ṣi を「キ(リ)」としたもの。

本資料では古い母音調和式に若干の新しい母音消去式とが混在していることになる。なお、本資料には、陀羅尼の部分には全て振り梵字が加えられている。従ってこれ等の読み方が梵字に依りつつ加えられたものである可能性も存

○尾薩^{ルフ}普^{ニ合}吒耶・

saru を「サルフ」としたものを。

これ等は、基本的に、先に見た「悉曇章」の転写本と同じ方法によるもので、末尾の母音と同じ母音を含む仮名が選択されて表記されている、所謂母音調和式の例である。

一方で、この資料には、

○曩野・怛摩^{トハ}・南・

○嚩日羅^{ニ合}・薩怛嚩^{トハ}・

の如く、*va-ti-ba* を「トハ」としたものが若干例見出される。陀羅尼が漢訳に従って読まれていると当然、その漢字の漢字音に沿った形が出現して来ることになるが、今、右の例で言うと「怛」は切韻端母曷韻 / *ta* / であって、むしろそれに従えば、「タバ」となって母音調和式と矛盾しないものである。にもかかわらず「トバ」となるのは、母音消去式と見られるものが、既にこの系統の資料には発生していたと見ることが出来る。

②胎藏秘密略大軌平安初期末点（東寺藏）（乙点図・真言宗）

○唵薩嚩播波・

sa-ta を「サラバ」としたものを。

○嚩日羅達磨・

dar-ma を「ダラマ」としたものを。

以上は母音調和式である。

○薩怛鑊没囉赦・

st-ham を「サトハム」としたものを

するであらう。

④金剛界儀軌永延元年（九八七）・長保六年（一〇〇四）・長元七年（一〇二九）点（大東急記念文庫蔵）（西墓点）

・天台宗寺門派）

○縛日羅ハサ・シラ

本資料の加点は何種類もの筆が入っており、分別が容易でないが、縛日羅ハサ・シラを「バザラ」と古い母音調和式に呼んだものと、「バジラ」と新しい母音消去式に読んだものとの両用の加点がある。「ザ」は永延点と長保点の文慶加
点、「ジ」は長元点と思われる。

○薩縛達莫サルハタルマ

sarva dharmāḥ 本資料では、全ての加点で新しい母音消去式で一貫している。

⑤金剛界儀軌寛仁四年（一〇二〇）点（石山寺蔵）（東大寺点・真言宗小野流）

○薩嚩達莫ラツク（以下、用例の濁点は全て漢字濁声点）

○薩嚩達摩ラツク

○唵嚩日嚩ニ合

○唵嚩怛他引

○達磨鉢囉タラ

○羯磨泥キヤウ

○訖啣キシ多 等

（以上母音調和式）

○地瑟蛇ニ合娑嚩ニ合輪マム

梵語音の仮名表記を巡って

○三波你演ハチエム耽タム等

(以上母音消去式)

⑥不動儀軌万寿二年(二〇二五)点(東寺藏) (仁都波迦点・天台宗山門派)

○縛日羅ハシラニ合タマ但マ麼マ合ニ (下の例)

○散捺羅サシ合ニ

○地目訖底チモキチ合ニ

○薩嚩恒羅サルハタラ合ニ

○鉢羅ハ合ニ引

○但他莫陁羅止タカシ合ニ引

○羅恨曩舍ラカンナ合マム鉢ハ

○跛哆ハハタ合アク惡ク (以下略)

(以上母音調和式)

○達摩タマ引ト妬ト

○縛日羅ハシラニ合ニ赦セ・縛日羅ハシラニ合タマ但マ麼マ合ニ

○達麼散捺羅タマ合ニ

○阿ア引サル薩ハ嚩タ恒ラ羅ニ合ニ

○度納婆トハ合ニ縛ハ

○毗廩ヒユ合ニ

○達麼タマ引マ駄タ但タ

○馱^ト縛^ハ… (以下省略)

(以上母音消去式)

この資料の辺りから、母音消去式の例が増加して来る。

⑦不動念誦次第長暦元年(一一〇三七)点(石山寺藏) (宝幢院点・天台宗山門派)

○…善^サ地^ヂ薩^サ埵^ト…

○捨^シ娑^ヤ陁^タ…

○地^チ蠅^{エイ}…

○鉢^ハ羅^ラ…^ナ摩^マ… (以下省略)

(以上母音調和式)

○…薩^{サル}嚩^ハ他^ハ…

○曩^ナ麼^マ薩^サ婆^バ…

○薩^{サル}婆^バ恒^ヘ落^ロ…

○枳^キ惹^サ…^ニ羅^ロ

○薩^{サル}嚩^ハ吠^ヘ… (以下省略)

(以上母音消去式)

⑧金剛界儀軌長久三年(一一〇四二)点(東寺藏) (宝幢院点・天台宗山門派)

本資料は陀羅尼部が梵字と漢訳字の併記の形となつてゐるが、朱声点と振り仮名は全て漢訳字の方に加點されてゐる。多分、この時期には、事相の方面においては、陀羅尼の読みは全て漢訳字にたよつて読まれるような時代背景になつてしまつていたことを物語つてゐるのであらう。

とすれば、陀羅尼（及び一般の梵語）の読み方が一層漢字音式に流れて行つた可能性が見込まれる。そういう点に注目しつつ用例を見ておこう。（平仮名はヲコト点によるもの。）

- 薩^ル嚩^ニ達^ハ莫^バ（母音消去式）
- 婆^ソ嚩^バ婆^ニ（母音消去式）
- 薩^ル嚩^ル達^ル摩^引（母音消去式）
- 但^フ摩^ニ引^ハ喃^ム（母音調和式併漢字音式）
- 底^チ瑟^シ吒^ニ（母音消去式併漢字音式）
- 瑟^シ致^ニ麼^ハ吒^ム（母音調和式併漢字音式）
- 母^モ瑟^シ置^ニ鑾^ハ（母音調和式併漢字音式）
- 薩^ソ怖^ホ吒^ニ耶^ム（母音調和式）
- 薩^ソ普^ホ吒^ニ耶^ム（母音調和式）
- 鉢^ハ羅^ニ謀^キ紇^キ灑^サ（母音消去式併漢字音式）
- 唵^{オム}戰^ム捺^ラ嚩^引（漢字音式）
- 摩^シ訶^シ嚩^ニ日^ニ哩^ム（母音調和式併漢字音式）
- 底^シ瑟^シ吒^ニ（母音消去式併漢字音式）
- 涅^チ哩^ニ荼^ム（母音調和式）
- 底^シ瑟^シ吒^ニ（母音消去式併漢字音式）
- 涅^チ嚩^ニ哩^ム耶^ム（上母音消去式、下母音調和式）
- 囉^サ薩^ニ帝^ニ曳^ム（漢字音式）

- 鉢娜麼ハムダ (母音調和式併漢字音式)
- 羯麼ケル引 (母音消去式)
- 涅哩ヂリ捨也シヤ (母音調和式併母音消去式) (下母音消去式)
- 涅尾ヂ迦曇キヤ (漢字音式)
- 薩觀ソト婆 (母音調和式)
- 娜茄ダキヤ引吒也 (母音調和式)
- 鉢囉ハ拏ナ (母音調和式)
- 娑嚩ソソ演 (母音消去式)
- 薩嚩サ怛他引 (母音消去式)
- 嚩日羅ニヤ你耶チヤ (母音消去式)
- 羯娑ケルシヤ曇謨 (母音消去式)
- 觀瑟ソクタイ鉢ニヤ (母音消去式) (タイは漢字音式)
- 畝モ你耶ニヤ (母音消去式) (ニは漢字音式)
- 囉濕ラシ弥ミ (母音調和式併母音消去式)
- 嚩日囉ニヤ悉弭多シミ (母音調和式併母音消去式)
- 娜步タボ多 (漢字音式)
- 必哩ヒ底リ底リ反反 (母音調和式併母音消去式併漢字音式)
- 濕嚩ジバ囉ニヤ (母音消去式併漢字音式)
- 底乞叉ヂキ拏ニヤ (母音消去式)

梵語音の仮名表記を巡って

- 羯磨ケルマ日囉ニ合 (母音消去式)
- 薩嚩訶サハ (母音消去式)
- 尾濕嚩シ (母音消去式併漢字音式)
- 鞞摩訶バリママ (誤読力)
- 訥哩庾馱那トリユ (漢字音式)
- 鄒瑟吒囉トリス (母音消去式)
- 未嚩你マリチ (母音調和式併母音消去式併漢字音式)
- 畝瑟蘇スス (母音消去式)
- 達摩タマ (母音消去式)
- 讚唎キ (母音調和式併母音消去式)
- 底キ乞瑟拏シナ (母音消去式)
- 羯磨ケル (母音消去式)
- 枳惹キヤ (母音消去式)
- 室哩シ引吽ニ合 (母音調和式併母音消去式併漢字音式)
- 阿囊耶娑嚩アハ (母音消去式)
- 你庾チユ (漢字音式)
- 涅ニル婆也怛鑠ニ合 (母音消去式)
- 鉢囉ニ合訶邏ニ合 (母音調和式併漢字音式)

母音調和式が減少し、母音消去式が増加している。この母音消去式は、漢訳字の漢字音を読んだ場合（漢字音式）

と一致するものがかかり見られる。これは一面から言えば当然とも言えそうである。なぜならば、本資料の加点は全て梵字の方ではなく漢訳字に加点されているのであって、その漢訳が、既にそのような、母音調和式ではなく、母音消去式に該当する漢字が選択されていたからである。漢訳が全て母音消去式という訳ではないのであるが、「𑖀日哩」(vajri)、「𑖀日羅」(vajra)の如き例を挙げれば理解されるように、母音消去式に該当する漢字の選ばれた数が多いことは明らかである。かくして、漢訳陀羅尼の読み方が普及するにつれて、母音調和式から母音消去式へ漢字音式へと、陀羅尼の音が変化して行ったことが明らかになる。

但し若干問題になる部分がある。本資料では濁点を「ニ」で示し、比較的忠実に清濁を書き分けている。今、「縛日羅」についてみると、全ての例に振り仮名が無いので、その読みを知る事が出来ないが、その声点は「縛日羅」となっている。このことは本資料は「日」を全て清音で読んでいることを示している。即ち、「バサラ」であったことになる。この「バサラ」形は、例えば、東寺観智院蔵「降三世儀軌」永久二年点・西墓点に「縛日羅_ハ」とあるなど、他資料にも見られるところである。この形は変化して「縛日羅_ラ」となる。この用例も亦種々の資料に見られる。(例えば、随心院蔵「法華念誦次第」康和二年点、高山寺蔵「十八道念誦次第」院政期点等)。「バンザラ」は、現行の真言宗声明集である「南山道場声明類聚」などにその形で引き継がれている。

⑨金剛界儀軌万寿三年(一〇四五)点(石山寺蔵) (西墓点・天台宗寺門派)

○薩怖_ニ合吒耶

○囉恒_{タナ}寧_ニ合驟_{ヒト}

○多麼薩觀_ニ合 等

(以上母音調和式)

○薩𑖀達莫_ハ

梵語音の仮名表記を巡って

○達摩^{タルマ}囉^ラ…等「達摩」は全て「ダルマ」

(以上母音消去式)

○囉^{ネイヒ}恒^ニ寧^合驪^ヒ

漢字をそのまま読んだ例と見られる。

⑩金剛界儀軌永承六年(一〇五二)点(高山寺藏) (西墓点・天台宗門派)

○吒^{ソホ}枳^ニ・薩^ホ怖^ニ

○尾^{ソホ}薩^ニ普^合吒^ニ耶

○曩^{モソ}牟^ソ薩^ニ親^ニ諦^ニ

(以上母音調和式)

○薩^{サル}囉^ラ達^ル摩

○薩^{サル}囉^ラ達^ル摩 等「薩囉」「達摩」は全て「サルバ」「ダルマ」の母音消去式。

○囉^ラ日^ニ囉^ニ 等「囉日囉」は全て「バジラ」の母音消去式。

⑪大日経広大成儀軌永承七年(一〇五二)点(石山寺藏) (宝幢院点・天台宗山門派)

○薩^{ソホ}怖^ニ 合 吒^ニ ○囉^ラ吃^キ質^ニ 合

○鉢^ハ囉^ニ 合

○怛^チ哩^ニ 合

○母^モ怛^タ跋^ハ 合 引

○涅^チ哩^ニ 合 等

(以上母音調和式)

○嚩日囉 (全て「バジラ」)

○唵薩囉 (全て「サルバ」)

○達磨 (全て「ダルマ」)

○底瑟姪チシジダ

○阿味設觀アミセツクワン

○涅哩灑琰ニエリセツエン 等

(以上母音消去式＝漢字音式)

以上、平安後期後半期以後のものは大部分天台宗系の場合であったが、以下に少し真言宗系のものを取り上げてみる。

⑫真言集承安元年(一一七二)写(仁和寺藏) (高野山真言宗勝賢説、次項③参照)

○唵薩囉但他オムサツハ 多タ・波ハ 那ナ 滿マン 那ナ 南ナム・迦魯カラム 引ヒキ 引ヒキ

○唵婆囉オムボラ 婆囉ボラ 林駄リンダ 薩囉サラ 達磨ダマ 婆囉ボラ 林駄リンダ 林度感リンダカン

以下、用例は省略するが、母音調和式を保存する度合いが高い。「薩囉」「達磨」は全てこの形が採用されている。

⑬金剛頂蓮華部心念誦次第建曆二年(一一二二)写加点(円堂点・仁和寺真言宗)

○唵薩囉但他オムサツハ 藥多ヤクダ・播ハ 那ナ 滿マン 那ナ 囊ナウ・迦魯カラム 引ヒキ 引ヒキ

○唵婆囉オムボラ 婆囉ボラ 林駄リンダ 薩囉サラ 達磨ダマ 婆囉ボラ 林駄リンダ 林度感リンダカン

本資料の読み方は⑫と全く同じであり、同一の伝承線上にあるものであることが明らかである。真言宗の陀羅尼の読誦法は古いものを固定させた形で後々まで良く保存されていると言える。

扱、以上の様に、漢訳陀羅尼の読みの場合においても、平安初期～後期初頭(大旨一〇二〇年頃)の密教經典におい

ては、古い母音調和式の表記法が取られており、「達磨」^{ダラマ}「縛日羅」^{バザラ}形であったことが確認されるであろう。平安朝後期以後、これ等は母音消去式と本稿で呼称した方式へと変化し、「ダルマ」「バジラ（但し「バサラ」「バンザラ」の形も伝承並存、但しこれは真言宗系のものに多い）」の形が一般的になって行つた。そして、この母音消去式は、その漢訳字に注目してみると、その漢字音と一致する場合が多いのであつて、結局、漢訳字の字音読の一般化ということが、こうした動きの背景になつたものとして把握することが出来るであろう。

所で、右に列挙した密教経典の陀羅尼の音読の一例一例に注目してみると、資料ごとに異なりの存することに気づく。この異なりの最も大きな原因は、日本漢字音の二重性に起因するものであつて、当該字を呉音で読むか、漢音で読むかによつて生じた異なりである。その点に注目してみると、必ずしもこれ等の資料の範囲では明確な傾向性を指摘することが出来にくい。各個人によつて区々であつたのか、或いは宗派によつて何らかの規則の様なものが形成されていたのかどうかについては尚今後のつめを行つてみる必要が有る。

3、法華経陀羅尼の仮名転写

扱、ここでは、右のような問題に対して一つの見通しを得るために、法華経陀羅尼について、三つの資料を相互に比較しながら、検討を加えてみたいと思う。

ここで取り上げる資料は次の三点である。

①高山寺蔵「法華経陀羅尼」大治元年（一一二六）点

この資料は、梵字の本文と漢訳とを併記し、その両方に振り仮名を加えたものである。これによつて、院政期の梵字読みと漢字読みとがどれ程乖離していたかの手掛かりを得ることが出来るであろう。

奥書は次の如くである。

「大治元一十月廿九日（別紙）書寫了（花押）
真言宗御室寛信作

② 醍醐寺藏「諸経中陀羅尼」^(二)

この資料は天台宗の慈覚大師円仁・三井大阿闍梨慶祚・谷阿闍梨皇慶・明覚という著名な学僧の読み方を伝えたとするものであつて、これによつて、時代的な変化と、個人間の読み方の相違を知ることができらるであらう。

③ 仁和寺藏「真言集」承安元年（一一七一）写本

奥書は「承安元年六月十六日於高野／御山傳受勝賢了」（別筆）「右真言集一卷寛信作永正十五年秋七月十七日於真光院南窓虫弘了／沙門覺道／御奥書喜多院御室御筆也」と有る。

右の奥書から知られる如くこの資料は御室寛信作とする漢訳陀羅尼集で、高野山で勝賢より守覚法親王が伝受したものである。真言宗の法華経陀羅尼の読み方を知る確実な資料である。

以下に、この三点の読み方を一覧表として示し、相互に対照してその間の読み方がどの様になつてゐるかを検討してみることとする。

①は高山寺の④梵字と⑥漢訳文、②⑦は醍醐寺本の円仁の読みとするもの、①は慶祚、⑦は皇慶、④は明覚、③は仁和寺本、である。（改行は高山寺本による）（高山寺本には梵字の異本校合が多数有るが省略した）。（声点は省略し、濁点は濁音仮名で表示した。）

藥王菩薩陀羅尼

anye manye manye mamanye cile calite same sami tavi sente

梵語音の仮名表記を巡つて

③	② ㄷ	② ㄷ	② ㄷ	② ㄷ	① b	① a	
目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}
帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}	目 ^{ボウ}
多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ
履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}
履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア
璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}
沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}
履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}	桑 ^{サウ}
履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}	沙 ^{シャ}
履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}	履 ^{メイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}
裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア
叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}	叉 ^{キヤ}
裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}	裔 ^{エイ}
+	+	+	+	+	+	+	+
阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア	阿 ^ア
耆 ^キ	耆 ^キ	耆 ^キ	耆 ^キ	耆 ^キ	耆 ^キ	耆 ^キ	耆 ^キ
膩 ^ニ	膩 ^ニ	膩 ^ニ	膩 ^ニ	膩 ^ニ	膩 ^ニ	膩 ^ニ	膩 ^ニ

mukle muklame same avisame samme same ksaye aksaye aksini

③	② ㄷ	② ㄷ	② ㄷ	② ㄷ	① b	① a	
安 ^{アン}	安 ^{アン}	安 ^{アン}	安 ^{アン}	安 ^{アン}	安 ^{アン}	安 ^{アン}	安 ^{アン}
尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ
-	-	-	-	-	-	-	-
曼 ^{マン}	曼 ^{マン}	曼 ^{マン}	曼 ^{マン}	曼 ^{マン}	曼 ^{マン}	曼 ^{マン}	曼 ^{マン}
尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ	尔 ^ニ
二	二	二	二	二	二	二	二
摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ
祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ
三	三	三	三	三	三	三	三
摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ	摩 ^マ
祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ	祢 ^ニ
四	四	四	四	四	四	四	四
旨 ^シ	旨 ^シ	旨 ^シ	旨 ^シ	旨 ^シ	旨 ^シ	旨 ^シ	旨 ^シ
隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}	隸 ^{レイ}
五	五	五	五	五	五	五	五
遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}	遮 ^{シャ}
梨 ^リ	梨 ^リ	梨 ^リ	梨 ^リ	梨 ^リ	梨 ^リ	梨 ^リ	梨 ^リ
第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}	第 ^{ダイ}
六	六	六	六	六	六	六	六
除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ
咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}	咩 ^{マイ}
羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}	羊 ^{ヤウ}
音 ^{イン}	音 ^{イン}	音 ^{イン}	音 ^{イン}	音 ^{イン}	音 ^{イン}	音 ^{イン}	音 ^{イン}
除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ	除 ^ヂ
履 ^{レイ}	履 ^{レイ}	履 ^{レイ}	履 ^{レイ}	履 ^{レイ}	履 ^{レイ}	履 ^{レイ}	履 ^{レイ}
四 ^シ	四 ^シ	四 ^シ	四 ^シ	四 ^シ	四 ^シ	四 ^シ	四 ^シ
反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}
多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ	多 ^タ
璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}	璋 ^{チヤウ}
八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}	八 ^{ハチ}
羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}	羶 ^{シヤウ}
輪 ^{リン}	輪 ^{リン}	輪 ^{リン}	輪 ^{リン}	輪 ^{リン}	輪 ^{リン}	輪 ^{リン}	輪 ^{リン}
半 ^{ハン}	半 ^{ハン}	半 ^{ハン}	半 ^{ハン}	半 ^{ハン}	半 ^{ハン}	半 ^{ハン}	半 ^{ハン}
反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}	反 ^{ハン}
帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}	帝 ^{テイ}
九	九	九	九	九	九	九	九

	① a	① b	② ①	② ②	② ③	② ④	② ⑤	③
sentē	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>
same	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>
tharāṇi	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>
alokahāṣe	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>
pradyavikṣadī	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>
nevīḍye	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>
abhyantā	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>
	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>
	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>

ra	① a	① b	② ①	② ②	② ③	② ④	② ⑤	③
nemesī	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>	帝 <small>テイ</small>
atyantāpariśuddhe	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>	餘 <small>ヒ</small>
ukkuḷe	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>	陀 <small>タ</small>
mukkuḷe	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>	盧 <small>ロ</small>
arale	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>	婆 <small>ハ</small>
para	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>	毗 <small>ヒ</small>
	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>	阿 <small>ア</small>
	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>	便 <small>ビ</small>
	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>	多 <small>タ</small>

梵語音の仮名表記を巡って

① a 𑖀 𑖀𑖇 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

① b 𑖀 𑖀𑖇 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

③ 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

soṅḥanti r̥ghoṣane bhāṣyabhāṣyaśūddhe mantra mantrakṣayate uruṭau

① a 𑖀 𑖀𑖇 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

① b 𑖀 𑖀𑖇 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

② 𑖀𑖂 𑖀𑖄 𑖀𑖆 𑖀𑖈 𑖀𑖊 𑖀𑖌 𑖀𑖎 𑖀𑖐 𑖀𑖒 𑖀𑖔 𑖀𑖖 𑖀𑖘 𑖀𑖚

③ 僧伽涅瞿沙祢三十四婆舍婆舍輸地三十五曼多邏三十六曼多邏三十七郵樓多郵

	ruia	kausaṛya	aksala	aksavāṭaya	avālo	amanya	natāya
①a	下入	𑖀𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩
①b	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②a	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②b	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②c	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②d	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②e	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②f	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②g	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②h	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②i	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②j	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②k	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②l	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②m	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②n	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②o	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②p	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②q	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②r	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②s	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②t	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②u	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②v	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②w	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②x	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②y	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
②z	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多
③	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多	樓多

勇施菩薩施羅尼

	jva	le	mahāvāle	ukki	bukki	ale	alavate	nite	nivā vate
①a	𑖀𑖩	𑖀𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩	𑖀𑖩	𑖀𑖩	𑖀𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩	𑖀𑖩	𑖀𑖩𑖩𑖩
①b	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②a	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②b	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②c	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②d	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②e	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②f	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②g	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②h	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②i	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②j	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②k	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②l	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②m	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②n	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②o	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②p	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②q	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②r	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②s	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②t	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②u	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②v	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②w	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②x	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②y	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩
②z	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩	座摩

梵語音の仮名表記を巡って

③	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
②	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
②	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
②	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反
	座 ^座	座 ^座	座 ^座	座 ^座	鎌倉 反

hir
ni
vini
civini
niyini
hir
iyivati

③	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
②	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
②	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
②	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
②	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
①	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
①	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ
	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ	伊 ^イ

多門天

ali
nali
denali
analo
nali
kunali

㊁
㊂
㊃
㊄
㊅
㊆
㊇
㊈
㊉
㊊
㊋
㊌
㊍
㊎
㊏
㊐
㊑
㊒
㊓
㊔
㊕
㊖
㊗
㊘
㊙
㊚
㊛
㊜
㊝
㊞
㊟
㊠
㊡
㊢
㊣
㊤
㊦
㊧
㊨
㊩
㊪
㊫
㊬
㊭
㊮
㊯
㊰
㊱
㊲
㊳
㊴
㊵
㊶
㊷
㊸
㊹
㊺
㊻
㊼
㊽
㊾
㊿

持国天施羅尼

③	②	②	②	②	①
阿犁	阿犁	阿犁	阿犁	阿犁	阿犁
犁	犁	犁	犁	犁	犁
一	一	一	一	一	一
那	那	那	那	那	那
犁	犁	犁	犁	犁	犁
二	二	二	二	二	二
兔	兔	兔	兔	兔	兔
那	那	那	那	那	那
犁	犁	犁	犁	犁	犁
三	三	三	三	三	三
阿	阿	阿	阿	阿	阿
那	那	那	那	那	那
虛	虛	虛	虛	虛	虛
四	四	四	四	四	四
那	那	那	那	那	那
履	履	履	履	履	履
五	五	五	五	五	五
拘	拘	拘	□	拘	拘
那	那	那	那	那	那
履	履	履	履	履	履
六	六	六	六	六	六

③	②	②	②	②	①	①
阿伽	阿伽	阿伽	阿伽	阿伽	阿伽	阿伽
伽	伽	伽	伽	伽	伽	伽
祢	祢	祢	祢	祢	祢	祢
一	一	一	一	一	一	一
伽	伽	伽	伽	伽	伽	伽
祢	祢	祢	祢	祢	祢	祢
二	二	二	二	二	二	二
瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿	瞿
利	利	利	利	利	利	利
三	三	三	三	三	三	三
乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾
施	施	施	施	施	施	施
利	利	利	利	利	利	利
四	四	四	四	四	四	四
施	施	施	施	施	施	施
利	利	利	利	利	利	利
五	五	五	五	五	五	五
摩	摩	摩	摩	摩	摩	摩
蹬	蹬	蹬	蹬	蹬	蹬	蹬
者	者	者	者	者	者	者
六	六	六	六	六	六	六
常	常	常	常	常	常	常
求	求	求	求	求	求	求
利	利	利	利	利	利	利
七	七	七	七	七	七	七
浮	浮	浮	浮	浮	浮	浮
樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓
莎	莎	莎	莎	莎	莎	莎
拈	拈	拈	拈	拈	拈	拈
八	八	八	八	八	八	八
頰	頰	頰	頰	頰	頰	頰
底	底	底	底	底	底	底
九	九	九	九	九	九	九

十羅刹

梵語音の仮名表記を巡って

② 僧伽兜略阿羅帝波羅帝薩婆僧伽三摩地伽蘭地七薩婆達磨修波利刹
 ② 僧伽兜略阿羅帝波羅帝薩婆僧伽三摩地伽蘭地七薩婆達磨修波利刹
 ② 僧伽兜略阿羅帝波羅帝薩婆僧伽三摩地伽蘭地七薩婆達磨修波利刹
 ③ 僧伽兜略阿羅帝波羅帝薩婆僧伽三摩地伽蘭地七薩婆達磨修波利刹

te sarvasattiva rūtakausalāyādogati sīgavikṛīdite

① 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝
 ① 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝
 ② 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝
 ② 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝
 ② 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝
 ② 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝
 ③ 帝薩婆樓駄舍略阿伽地辛阿毗吉利地帝

高山寺本の梵字の読み方は、どのような学習伝承法が有ったのかは不明であるが、総体として、梵音に極めて忠実である。

p₁praハラ、o₁dhamaダラマ、o₁niチリ、o₁niチリ、u₁pruホロ、p₁avartāハラ(ナタ)、
 m₁saサラ(バ)、n₁kraキヤラ、o₁dhamaタラ(マ)

右の例は、明らかに古い平安初期に行われていた母音調和式の梵字に従う読み方である。

梵語音の仮名表記を巡って

一方で、新しいものも見られる。

カ ksa キサ、~~カ~~ ksi キシ、~~カ~~ si: 主テイ、カ ka キシヤ、カ ja ジバ、~~カ~~ vante ハリテイ、
 (カ) nira チリ(キヤ)

右の例は、母音消去式に相当している。従つて、梵字の読み方は、母音調和式を保存しつつ、新しい消去式をも混在させていると言える。

次に、漢訳字の読み方についてみると、全体が明らかに漢字音式のものである。

ka = 又 = サ、~~カ~~ = 滙究 = オウキウ、~~カ~~ = 表 = チツ、~~カ~~ = 達磨 = タツ(但し左側仮名)、
~~カ~~ = 郵樓 = イウロウ、等、以下略。

右の例は、原梵語音とは無関係に、その漢訳字の字音による読み方である。しかも、それ等は、呉音・漢音という日本漢字音からみると、古い呉音系字音に従つた場合が多いと言える。尔・祢・咩・履・目・牟等は呉音形に相当する。但し、~~カ~~・~~カ~~・~~カ~~・~~カ~~の如き漢音形も若干ながら混入されている。従つて、漢訳陀羅尼の読み方は、原梵語音とはかなり離れたものになっているのである。

この高山寺の状況を、前記1、2項の検討結果の延長線上に置いてみると、梵字陀羅尼の読み方は、かなり忠実にこの大治元年時代まで伝承されているが、漢訳陀羅尼の読み方は漢字音式となり原音とは相当の離れを見せるに至つたということになる。本書の読み方がどの様な系統を引いたものかについては、後に考えてみることにする。

次に醍醐寺本の四家の読み方について見ることにする。

先ず、「円仁八七九四く八六四V」の読みとするものについて見ると、他の三家と比較すると、原梵語音の形を保存している場合が多い。カ = ka = 又 = キサ(他は又 = サ・シヤ)、~~カ~~ = 簸 = ハラ(他は「ハ」)、~~カ~~ = dya
 = 便 = ビエン(他は「ベン」)、~~カ~~ = ja = 座 = ジバ(他は「ザ」)、~~カ~~ = sta = 多 = サタ(他は「タ」)の様だ

ある。また、濁点は使用されていないが、「涅槃ニルヴァーナ (nirvanu) 」の如く、濁音字母で注音されていること。「首迦スウカ (suka) 」の如く拗音字が使用されていることは、これ等が古い平安朝初期のⅡつまり円仁時代のⅡ加點様式を反映している証拠であろう。本点の「達磨」は「ダルマ」となっており、そうすると、平安初期ではあつても、円仁は既に二重母音を新しい母音消去式で読んでいたということになりそうである。

三井寺の慶祚八九五く一〇一九√は、同じ天台宗であつても、特異な読み方を採用していたことになる。即ち、徹底して漢音によつて読んでいるのである。詳しいことは、右に掲げた用例で明らかなので、略すことにするが、漢訳陀羅尼においては、この様に漢音読みに徹する一流も存在していたという証拠になるものである。従つて「達磨」は「ツバ」という形としても存在していたことになる。但し、今の所、類例が見出し得ていないから、一般的に広く流布した読み方ではなかつたと推定される。

次の皇慶八九七く一〇四九√、明覚八一〇五六く一一二二以後√二家の読み方はほぼ共通しており、共に平安後期く院政期密教經典における母音消去式併漢字音式に同じものと見て良い。天台宗の安定期に入つた陀羅尼の読み方であると云える。この二家の読み方と高山寺本の漢訳とは良く共通するので、高山寺本は天台宗系のものであろう。

最後に、真言宗の読み方である仁和寺本「真言集」の場合について見る。

本書の場合、振り仮名を見ると複数の仮名が加えられており、陀羅尼の読み方が決して安定していなかつたことを物語っているが、採用した方の読み（原本では、その仮名を○で囲んでいる）方を見ると、古い平安初期の形を採用している場合が多い。例えば次の如くである。

刃キシヤ、簸ハシ、差キシヤ、座シバ、多サタ、婆地ハリチ、婆帝ハリチ、利キシヤ、埵ト

これ等は、先にも言及した様に、漢訳の段階で原梵語音の一部が無表記されたものであつて、漢字のみに注目したのでは原音を復元することの不可能なものであつて、梵陀羅尼による読み方が背景になつてゐるものであつて、しかも

それらは、基本的に母音調和式となつてゐる。この母音調和式であることは、右の両形並存例ばかりでなく、一形のみ示されている例、

薩婆、達磨、
サラバ、ダマ

もそうである。従つて、本書の場合は、全体としては平安朝初期の梵字に則してよんだ母音調和式の姿を反映しているものと見られることになる。高山寺本と同じ院政末期の資料ではあつても、真言宗の場合は、古い姿を留めた読み方が行われていたことになる。真言宗の保守性を垣間みることができないのではないかと思われる。

以上、三項に亘つて検討した所を纏めてみると次の如くなる。

①、梵文陀羅尼の読み方は院政期にまで降つても梵字に忠実にしかも平安初期の母音調和式で読まれていた（厳密には、いる場合もあつた）。

②、漢訳陀羅尼の読み方においては、天台宗内でも種々のものが行われていたが、時代が早いものは梵語音に忠実に、時代が降るにつれて漢訳字の漢字音に従う読み方が強くなつて来るという、時代的変遷が顕著である。寺門派慶祝の如く、全く原梵語音に無関係に、漢音で読むという行き方も出現した。

③、これに対して、真言宗の漢訳陀羅尼の読み方は保守的であつて、古い平安初期の母音調和式を保存する度合いが非常に高い。これは2項で検討した一般の漢訳陀羅尼の場合についても、3項で検討した法華経陀羅尼の場合についても全く同様であつた。

④、②③の宗派による違いは両宗の教学が進歩的か保守的かの違いによる現象であらう。

なお、漢訳陀羅尼の場合、漢訳された時代の違いによつて、充てられた漢字も異なり、字音も異なつてゐる。法華経陀羅尼の場合は日本漢字音の呉音で読んだ方が原梵語音には近くなり、孔雀経の様な新訳の場合には漢音で読んだ方が

原梵語音には近くなる。慶祚の読み方は従つて、当然、原梵語音とは全くかけはなれたものとなつてしまつてゐるが、多分「金剛界儀軌」等の密教経軌は、漢音読の方が適しており、その音読に日常携わつていた経験的事実が、法華経陀羅尼にも適用されたものであつて、天台宗では、そういう学問の在り方も許容されていたことが分かる。

二、梵語音と漢字音の仮名表記

扱、前項までに検討した梵語音の仮名表記法は、梵語音のみに存在する（つまり日本語と中国語には存在しない）重子音の表記を本邦人がどの様に行つて来たかに就いて見たものであるが、この重子音を除くと、梵語音と中国語音に存在して日本語には無かつたものとして、所謂開拗音と促音（中国語では入声韻尾・梵字では涅槃点で示される¹²）、撥音（中国語では鼻音韻尾・梵字では空点で示される¹³）がある。

更に、中国語のみに有つて、日本語及び梵語に無い音として所謂合拗音が存在する。この音の表記は特に注目される所となる。

今、これ等の音の表記がどの様になされて来たのかを、梵語音の場合は本稿で対象とした各悉曇章、漢字音の場合は先学の指摘されている平安初期訓点資料の四点、即ち、史掘魔羅經（八〇〇年頃加点）、大乘阿毗達磨雜集論（八〇〇年頃加点）、西大寺本金光明最勝王經（八三〇年頃加点）、地藏十輪經（八八三年加点¹²）を取り上げて、比較してみると、梵語音と漢字音の表記が同じ表記法（表記体系）の基盤を有していることが理解されるのではないかと考える。

即ち、基本的に、日本語の音節構造 v 、 cv 構造に「外れる部分」及びその「周辺部分」が「仮名」でなく「漢字」表記されていることを知ることができる。

《外れる部分》

（漢字音）

（梵語音）

梵語音の仮名表記を巡つて

○拗音部分(開) 初・守・向・生等、

去・沙・取・諸等

(合) 化・鬼・果・火等

○撥音韻尾

新・見・心等

三

○入声韻尾

七・發等

實・述

勿論、右の部分は、一方で仮名表記されている場合も存することは既に指摘されている通りである。即ち、開拗音の部分は、漢字音の場合「シア」のような「ア行の仮名」で表記され、撥音・入声音は、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ニ}$ 」、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ム}$ 」、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ウ}$ 」、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ツ}$ 」・チ、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{フ}$ 」、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ク}$ 」・キの如き仮名と、無表記とがなされている。一方梵字の場合は拗音は「キヤ」の如くヤ行しか出現しない。韻尾は二種で、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ム}$ 」、「 $\text{ㄷ} \parallel \text{ク}$ 」で表記され、「 ㄷ 」は無表記の場合も存する。

《周辺部分》

(漢字音)

○重母音(連母音)

草・水

西

少等

草

才

西

(梵語音)

扱、少なくとも、漢字音と梵語音についてみると拗音の漢字音「ア行」対梵語音「ヤ行」の違いのみであつて、他は全て共通する方法であると見なすことが可能であろう。

同じく外国語として、梵語も中国語も、それをいかに表記して行くかの試行錯誤が共通して行われていたと見て良いであろう。石山寺所蔵の一〇三二年加點「不動念誦次第」を見ると、漢字音も梵語音も「漢字」表記法が全く捨てられ、開拗音はシャ、シユ、シヨ、の様にヤ行の仮名で、合拗音は「クワ、クヰ、クエ」の如きワ行の仮名で表記されている。この後、よく知られている様に、仮名のみでの表記としてこの形で最終的に定着する訳であるか、その出発点が同じ基盤に在ったことを知ることができる。

但し、注目すべきは、漢字音の場合、開拗音は「ㄷア」の如くア行仮名で、梵語音の場合は「ㄷヤ」の如くヤ行仮名で、出発しているものが、やがて、梵語音の表記のヤ行表記に定着したという点である。梵語音表記の方に吸引力が有

つたらしいのである。

拗音表記でもう一つ注目すべきは、合拗音が漢字音専用であつて、梵語音の方には本来出現しないものであるが、その合拗音の仮名表記が開拗音に比してかなり遅れたという事実である。この事実については、既に先学の指摘されて来た所であるが、なぜ遅れたのか。

梵語音では合拗音は出現しないから、これ等の仮名表記を工夫する試行錯誤は必要が無かつた。全体に、外来語としての中国語、梵語の仮名表記は、その重点が梵語によりかかつて試行錯誤が行われて来た。その梵語に出現しない合拗音であつたが故に、その仮名表記の工夫が遅れたものではないであらうか。

外来語表記としての清濁の区別の工夫は、梵語音より始まり、漢字音へ波及した。四声点の実用も梵語音から始まつたのではないかと思われる。その声点の有気音無気音の区別も亦梵語音資料の方が出現は早い。これ等の事實は、梵語音の学習の方に外来語としての学習の重点が置かれていたと見る方が事實に近いことを物語りそうである。従つて、漢字音から梵語音へ（或いは、漢字音を通して梵語音への）学習が及んだと見る従来の方考え方は逆転して見なければならぬ可能性が有るといふことになる。

漢字音は直接学習が可能であつた。梵語音は、中国を介しての間接的な伝来であつたために、梵語音そのものを直接学習することが困難であつた。従つて、梵語音は漢字音に比してより一層研究の対象化が必要とされ種々の試みや工夫が要求されたものではなからうか。

梵語の音節末子音は ㄨ と ㄛ が有り、この二音は、語中に入ると所謂「連声」という現象を起こす。

ㄨ は次に来る子音によつて同化されて ㄨㄚ 、 ㄨㄙ 、 ㄨㄣ 、 ㄨㄉ 、 ㄨㄊ に変化し、 ㄛ は次に来る子音によつて同化されて ㄛㄚ 、 ㄛㄙ 、 ㄛㄣ に変化する。

一方漢字音は当初は、この様な変化は起こらず、 ㄉ 、 ㄊ 、 ㄋ 、 ㄌ 、 ㄍ 、 ㄎ 、 ㄏ は独立的であつて、平安後期に到つて、 ㄉ 、

一、^一は所謂促音化を起こし、梵語と同じ現象を呈するようになったものであろう。^二、^三、^四は、かなり後々まで独立しており、現代語に到つて「連声」現象に相当する同化現象を起こすものとなつてゐる。

この様に見ると、漢字音よりも、梵語音の方が複雑であつて、やはり日本人側から言つと、梵語音の連声の研究を通してそれらの表記法の工夫も発達したものでないかと思われるが、この様な視点での検討は今後の課題としておきたい。

注

(1) 例えば、澤田田津子「外来語における母音添加について」(『国語学』第百四十三輯)など。

(2) 『平安時代訓点本論考』^{『古点』}による。

(3) 書写奥書「嘉慶二年十一月十二日借得廬山寺経藏本／令書写之件本者覚大師将来正本〔法〕尤為／規模字点等併以模本様記〔撰〕撰宗海國梨之／校勘野村聖節之

(4) 朱書本奥書「件書以天元五年八月十八日指專使賜松前以九月廿二日登山寄住／披雲房始自同廿三日辛亥日至于同廿六日三箇日之間大西園梨御房／說已畢同学康上人耳台学僧□□為後賢悉之」

奥書「永和四年冬比借得天台実嚴僧正持本令書写了披／批記是智證大師於福州所令受給也尤珍重之賢宝記之／(朱)写本雖有朱点依繁略之了耳」

(5) 『仁徳正治五十年御書』隨心院聖教類の研究(汲古書院一九九五年刊)に全文の影印を収載。

(6) 馬淵和夫博士「日本韻学史の研究I」では、真言宗系統のものとして、淳祐の後、濟暹の前に置かれている。

(7) 8、9、(二)馬淵和夫編『形音義解 悉曇学書選集 第二卷』所収による。

(二) この資料は築島裕博士が「古点本の片仮名の濁音表記について」(『国語研究』)で紹介されたもので、奥書等は全てその論文に譲る。本稿は築島博士より恵与を受けた写真による。

(三) 春日政治「聖語藏央掘魔羅經の字音点」「高野山にて観たる古点本一二」(以上『古訓点の研究』所収)、同『第六号本 金光明最勝王經古点の国語学的研究』、小林芳規「訓点における拗音表記の沿革」(『王朝』第九号)、築島裕『平安時代語新論』等。

(三) 注①引用小林芳規博士論文参照。

〔付記〕本稿は平成七年八月十二日の第二十回鎌倉時代語研究会に於ける口頭発表を改稿したものである。

書名 采恋曇音章 靈巖寺和尚本歟

所蔵 東寺観智院

番号 二〇一箱二〇号

書写 平安初期写 (円行(七九八〜八五二)本の伝承有り)

加點 同時期加點

宗派

ヨコト点 (ナシ)

梵語		漢語		和語					
ア	阿	イ	以	ウ	于	エ	衣	オ	衣
カ	可	キ	岐	ク	久	ケ	介	コ	去
ガ		ギ	志	グ		ゲ		ゴ	
サ	尤	シ		ス	須	セ	七	ソ	十
ザ		ジ		ズ		ゼ		ゾ	
タ	太	チ	知	ツ	由	テ	天	ト	止
ナ	奈	ニ	仁	ヌ	奴	ネ		ノ	乃
ハ	波	ヒ	比	フ	不	ヘ		ホ	保
バ	馬	ビ	美	ブ	不	ベ	米	ボ	母
マ	末	ミ	赤	ム	ム	メ		モ	毛
ヤ	也			ユ	由	江	江	ヨ	与
ラ	ラ	リ	利	ル	留	レ	礼	ロ	呂
ワ		ヰ				エ		ヲ	
コ	久	ク	元						
セ	取	ソ	諸	セイ	叟	去	去	セ	沙
ニ		ノ	咄	サイ	艾	西		草	
支	支	支	支	支	支	支	支	支	支

梵語音の仮名表記を巡って

